鼠浄土

むかし、すごく正直なおじいさんと、おばあさんがおって、おじいさんが山に行くにねぇ、大きなおにぎりを作ってもらって、おじいさんは山に行ったけども、仕事をしてもう疲れて、このくらい仕事をしたらひと休みしようかなぁと思って、おにぎりの笹の皮に包んだおにぎりを出して食べようとしたら、どうした弾みかコロコロ転がっていってねぇ、さぁたいへんだ、おなかがすいているのに、そのおにぎりを転がしてやるともったいないなぁ、と思って、自分でおにぎりを追っかけて行ったんだって。そしたら、そこに小さな穴があってにぎやかな、ガヤガヤする音が聞こえるので、「不思議だなぁ、なんだろなぁ」と思って、その穴にしゃがんで耳をすまして聞いてみたらねぇ、鼠たちが、大きな声で、なんかペッタンペッタンお餅ついてるような音がして、盛んに歌っているので、何を歌っているんだろうなぁ、と思って聞いてみたら「鼠百まで生きだども、ねーご(猫)の声こ、聞だごとねぇ。カンカラ　モンカラ　カンカラカンカラカン、カンカラ　モンカラ　カンカラカン」なぁんとも一生懸

命に、楽しそうにお餅つきしてたけども、おじいさんはこの鼠たちはどこからお米を持ってきてついてるんだろうなぁ、だけどもオレもおなかがすいたしなぁ、ひとつ鼠をびっくりさせてやろう、と思って、大きな声で「ニャオーン、ニャオーン」って言ったら、「アーッ、ねこだぁー」、もうみんな蜘蛛の子を散らすようにして、逃げて行ったんだって。そして、その後をみたらね、お餅だと思ったのが、すごいお金がね、臼の中からザックラ　ザックラ、ザックラ　ザックラ出てきてねぇ、そのお金を鼠たちがついてたんだって。おじいさんはびっくりして、おなかもすいていたんだけど、「このお金をおばあちゃんに持って行ったら喜ぶだろうなぁ」と思って、それを今度、担いでお家に持って来て、「おばあさん、実はねぇ、こうやっておにぎりのかわりにお金をもらって来たよ」、「ははぁ、おじいさんよかったねぇ。そいでそのおにぎりは置いてきたんだねぇ」って言ったっけ、「うん、置いてきたよ」。それを聞いて隣のうちのおじいさんも、「よぉし、一つオレも金儲けしようかなぁ」。「隣のおじいさんは、大きなおにぎり持って行ったっちゅうから、おい、おばあさん、オレんとこにも大きなおにぎりを持って来い。持って行くように作ってけれじゃぁ」。次の日、おじいさんが話してたとおりの道を通って、お昼頃にわざわざそのおにぎりをコロコロ転がしてやったんだって。そしたらねぇ、鼠たちが「はぁ、昨日はお金とられたんだけれど、ようし、あのおにぎりをみぃんな取って、からにしておこう、臼をからにしておこう。そしてまた、これは大変なご馳走だから、みんなでまぁ、とにかくペッタンコやろう」ということで、ペッタンペッタン　ペッタンペッタンって歌いながら、「ねーごの声をきだごとねぇ。百なるまで生きだども、ねーごの声こ、聞だごとねぇ」。そうやってたら、そのおじいさんが大きな声で「ニャァォーン、ニャァォーン」って言ったもんだから、「そら、来たぞ。昨日のとおりには行かないんだぞう」って。はぁ、みんなねぇ、お金を持って、おにぎりも持って、みんないなくなったんだって。そうして、結局はねぇ、欲張りじいさん人のまねをして、あれしよう、得しようと思ったのに、一銭ももらわないほかに、おにぎりもみんな取り上げられたんだって。だからねぇ、欲するとだめなんだねぇ。まぁそういうことで、とっぴんぱらりのぷー、です。

豊嶋栄子（檜山・大正13年生・75歳）

〈解説〉

「鼠浄土」は、正直者の爺さんの幸運と、隣の欲張り爺さんの失敗を対比させる昔話で全国的に広く分布する。『通観』では「鼠の浄土」として県南部から北秋田にかけての類話が相当数拾われている。稲川町に伝わる話では、鼠穴に豆を転がしてやると鼠が爺さんを迎えに来て、餅をついてもてなし、婆さんに土産を持たせて帰す。それを見た隣の爺さんが豆を鼠穴に落として、同じように鼠にもてなされる。ところがこの爺さんはご馳走を全部取ろうとして猫の鳴き声をまねして鼠を追い払ってしまう。しかし真っ暗な穴の中で出られなくなって、欲張り爺さんは死んでしまう。

ここでの話者の豊島さんは昭和五十五年に同じ話をしており、それが『伝承文芸』に載っている。それと比較すると、五十五年の話の最後の結末は、欲張り爺さんにネズミが襲いかかり耳や鼻をかじるなどして、爺さんがほうほうの体で逃げ帰ることになっている。今回の話では細かなところで、最初におにぎりがころがってどこへ行ったかはっきりしていない。五十五年の話ではネズミ穴に入ったことになっている。また欲張り爺さんの行動は婆さんも承知で金儲けを期待していたことになっている。このように昔話の伝承は、同じ話者でも年数がたつと、細かなところで変化していく。